

追悼 高橋康雄先生

遠田 晤良

高橋さんは、われわれの目の前を全力で、あまりにも速く駆け抜けていった。その若すぎる死を思い、こころざしなかげで病魔に倒れた悔しさを思いやるとき、これほど悲しいことはない。痛恨の極みである。おもえば三年余の時間を共にしたに過ぎなかったが、高橋さんは文化学部の同僚として強烈な印象をのこして逝った。文化学部のスタート時には学科長評議員として、文字通り山口学部長の右腕として、北方文化フォーラムや土曜講座など率先して学部運営に新機軸を打ち出していった。その後いくばくもなくして山口学部長が学長に転じて後は、学部長の重責を担った。その間、細心にして果敢な仕事振りや学長を補佐しての諸葛孔明のごとき深慮は、身近に見てきたものにとつては驚嘆するしかないものであった。それよりもっと驚かされたのは、そんな仕事振りの合間に矢継ぎ早に放たれる彼の著書・論文であった。それまで編集者として忍耐のうちに培ってきたものを一気に吐き出すかのようなエネルギーに溢れていた。三年余の時間の中で、まさに八面六臂の仕事振りを強烈に印象付けて駆け抜けていった。

高橋さんの著書の末尾、著者紹介の項には必ず、旧満州に生まれると書いている。高橋さんが戦後幼く

して旧満州から父母の郷里である山形へ引き揚げたということは、出会いからまもない酒の席で知った。私は樺太から同じように両親の郷里である山形の農村に引き揚げて少年時代をすごした。あの戦後の混乱期に悔しい思いを味わった共通の体験から、私は特に親しみを覚えたが、彼も私を同郷人扱いして山形での少年時代を懐かしげに語ったりした。

彼は、いつも手提げ袋を持っていて、その中には図書館から借り出した本がつまっているのが常だったが、研究室を訪ねてくれるときは、その中から魔法のように、「これ山形の干し柿だよ。やっぱり味が違うよ」とか、「これ、山形から送ってきた、もつてのほかだよ。遠田さんなら食べ方を知っているでしょ」と食用菊を取り出したりした。少年ばいはいにかむような笑顔で、時に人の心の奥を覗き込むような深い眼をすることがあったが、それも今は還らない。

忌まわしい病魔に取り付かれたときも、すでにその方面の知識をもっていて、自然医学というものを中心にした独得な治療法だという、「森下自然医食療法」による闘病計画を実践していた。それは、玄米、菜食を守る厳しい自己管理を必要とするものだったが、彼は強烈な意志でそれを実践していたし、それに希望を繋いでいた。身内に同じ病人を抱えた私のために、その療法を提唱している森下敬一の著書を何冊も紹介してくれた。その頃の確信に満ちた話しぶりから、必ずやかつての健康を取り戻すに違いないことを信じていた。会うたびごとに激しく痩せていく姿に傷ましさを禁じえなかったが、食事療法の効果の表れなのだと言う彼の言葉を信じざるを得なかった。徹底して打ち込む性格と人一倍旺盛な研究心とは病魔と

の戦いにも例外ではなかった。美味しいものを食べるよりも、検診で数値が改善されるのが、今は励みなんだとストイックに笑っていた横顔を思い出すと、痛恨の思い一入のものがある。

彼の最初の著作が『宮沢賢治』であったように、彼が生涯関心をもち続けたのは宮沢賢治であったように思われる。東北人としての賢治と賢治の宗教的世界に惹かれていたようである。吉本隆明との共著といってもいい対談としてまとめられた『新・死の位相学』のなかで、彼は賢治の「『詩人は苦痛をも享樂する／永久の未完成これ完成である』という言葉が僕は好きですね」と語っている。死の影もさしていなかった頃の、こんな言葉を見せられると、闘病の苦痛に耐えていた時の彼の胸中を思い胸が痛む。「永久の未完成」が完成だと達観して銀河鉄道の旅に行ってしまったのだろうか。

幽冥境を異にするとも、心に沁みるいくつもの暖かい思い出と、遺された彼の著作の世界がいつまでもわれわれに語りかけてくる。魂の世界に彼が放った光は不滅のものであることを信じる。

「君あしたに去ぬ ゆふべの心千々に何ぞ遙かなる」。謹んでご冥福を祈る。